
 紹 介

「ワックスオクルージョン特論」に参加して

相 馬 泰 栄

明倫短期大学 歯科技工士学科

1. はじめに

明倫短期大学の歯科技工士学科専攻科は平成11年4月に開講し、今年で8年目を迎えた。この間、専攻科では将来の歯科医療に必要な高度な専門分野の知識と技術を習得する為に、講義や技術の研鑽に励んできた。また、平成17年度には歯科技工界の第一線で活躍されている著名な講師を招き、臨床技工プロ講座を開講し、今年度で3回目を迎えた。臨床技工プロ講座の受講生は本学の専攻科生だけではなく、現在、社会で活躍している歯科技工士に対しても「科目履修生」として講座を開講し、単位認定を行っている。

2. 講座内容の紹介

「ワックスオクルージョン特論」の講座は榊原功二臨床教授が担当し、下顎運動に調和した咬合を再構築するための基本的な咬合理論と実務に直結する実技指導が4日間のコースで実施された。特に本コースでは生体に調和した咬合の再構築が歯や歯周組織、顎関節、咀嚼筋に負担を与えないことにも繋がり、クレンチングやブラキシズムに対応する咬合の再構築が最も重要である。そのためには、患者固有の咬合状態を把握し、患者の生理運動から得た客観的データに基づき、生体に調和した修復物を製作しなければならないとの考えから天然歯の萌出順に従って、後方歯から前方歯へと歯のガイド傾斜の角度を強めていく順次誘導咬合の基本的な理論とワクシング法について、6月16日(土)～17日(日)と7月7日(土)～8日(日)の4回に亘り、本学内で実施された。

1) 講習1回目

講習は榊原先生の「なぜ、咬合器を使うのか？」

との問いかけから始まり、受講生からは様々な回答や意見が出された。また、人にはそれぞれ異なった骨格パターンがあり、それによってさまざまな咬合様式が見られる。特にクラスⅡやⅢが見られる有名な運動選手やタレントが紹介され、和やかな雰囲気であった。破壊された歯冠を回復するためには単に歯冠形態を回復するのではなく、患者の生体に調和した咬合の再構築こそが重要であり、チェアサイドでの咬合調整をできるだけゼロに近づけることこそが、歯科技工士にとってのゴールである。そのため、咬合面形態の再現においては、生体の持つガイダンスの順次性に従って、後方大臼歯から順次前方歯へと誘導の傾斜を強め、犬歯誘導型の順次誘導咬合(シーケンシャルオクルージョン)を完成するための基本的な考えとワックスアップについて座学が行われた。

2) 講習2回目

順次誘導咬合を完成するためのワックスアップ手順や下顎の誘導路について説明の後、ギルバハ・リファレンス咬合器の特徴や取扱い説明が行われた。受講生にとっては始めて見る咬合器であったため、咬合器の調整や操作に戸惑いながらも、準備された上顎模型にパッシブセントリック、下顎模型にアクティブセントリックをマーキングし、ワクシングを開始した。テーブルクリニックでは上顎第一大臼歯から第二小臼歯、第一小臼歯、犬歯、前歯の順にワクシングが行われたが、受講者にとっては初めてのことであり、完成までには至らなかった。また、次回までに支台歯形成された単冠模型を準備するよう指示が出され、講習が終了した。

3) 講習3回目

睡眠ブラキシズムによる歯科疾患やブラキシズムとストレスとの関係について座学が行われた。その

後、前回、完成までに至らなかったワックスアップの進捗状況を確認し、アドバイスをを受けながら引き続きワックスアップを行い、歯冠形態を完成した。

4) 講習4回目

スライドを通して日頃の臨床技工におけるラボサイドワークについて、バイト材のトリミングや上下顎模型の接触状態の確認から咬合器装着までの操作説明を受けた。その後、受講生がそれぞれ準備した模型に見られる磨耗面の状態から咬合チェックやアドバイスを受けた後、咬合器に模型装着を行った。前回の基礎知識を基に、ワックスアップを行い、何とか課題を仕上げる事ができた。

3. まとめ

咬合調整ゼロを目指すクラウン・ブリッジ技工の条件となるのは、・正確な支台歯形成・正確な印象採得とバイト採得・正確な下顎模型の装着・正確な咬合器への付着と適切な咬合器調整である。しかし、実際の臨床においてはこれらの条件が必ずしも整っているわけではない。患者が本来有する、後方歯から前方歯へと展開角が急峻になっていく歯の順次性に基づく犬歯誘導咬合を原則に据えて、可能な限り再現することが、患者のためになることであると結んで、4回の講習が終了した。

4. おわりに

本講習に参加し、技工雑誌で知ったシークエンシャルオクルージョンの基本的な考えを、豊富なスライドを通して初めて理解することのできる講習であった。今後は臨床技工に応用するための技術を習得し、咬合理論の一つとして、学生教育にいかに関与していくべきかを考えたい。

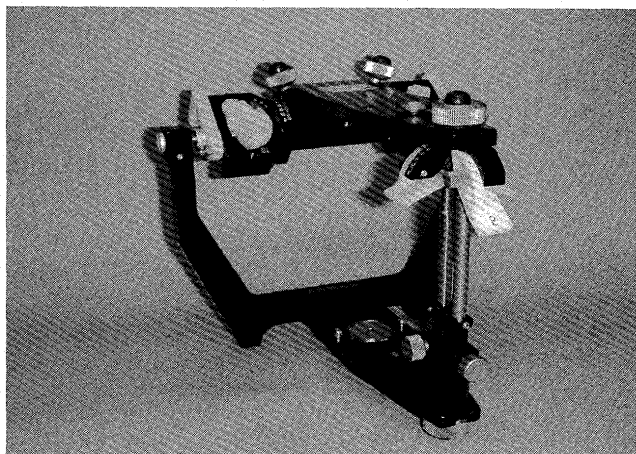


図1 実習で使用したギルバッハ・レファレンス咬合器



図2 実習風景 (受講生が準備した模型の咬合状態をチェック)



図3 受講生との記念撮影

文 献

- 1) 榎原功二：順次誘導咬合で咬合調整ゼロを目指すクラウン・ブリッジ技工（前・中・後編）。歯科技工，34：683-704，1095-1105，1467-1486，2006